



2016年度『戦時下日本の大衆メディア研究』班 第2回研究会

# 植民地朝鮮の紙芝居 — 視覚メディアを利用した情報宣伝

日時：2017年1月21日（土）13:00～15:00  
場所：神奈川大学横浜キャンパス 9号館 2-212号室

権希珠（建国大学校 アジアコンテンツ研究所 助教授）

## 1. 植民地朝鮮における紙芝居の出現

植民地朝鮮において紙芝居の出現を最初に報道したのは『釜山日報』である。1934年10月21日の記事で、飴売行商の紙芝居が子供達の間で流行しているが、紙芝居の内容が主に軍事物であるため、教育上よくないという見解を示した。このような視座は紙芝居を子供の遊戯に限定したものと見られる。



〈図1〉 当時の釜山における紙芝居公演

ところが、1936年頃から紙芝居が大人を対象として、多方面に活用され始めた。その流れは大きく二つに分けることができる。一つ目は地方の政策広報や郵便局・金融組合及び財務局からの簡易生命保険・納税督促に関する広報などである。二つ目は、1937年日中戦争以降、国策の宣伝としての思想教育を行うために紙芝居が活用されたことが挙げられる。

これらの二つの流れに共通するのは、絵を活用した情報宣伝ということである。当時、朝鮮人は識字率が低く、視覚イメージは情報伝達に大きな役割を果たした。さらに、紙芝居はストーリーを持ち、無声映画の弁士のような人がいたため、物語の伝達も容易であった。特に、映画のようなメディアに容易に接することができなかった地域の朝鮮人は、紙芝居を娯楽として楽しむことができ、

〈表1〉 植民地朝鮮の紙芝居目録

発行先	タイトル	枚数	発行年度
朝鮮総督府の情報科	支那事変と銃後の半島	28	1937.11
	金少佐の奮戦	15	1937.12
	生業報国	16	1937.12
	愛国少年	16	1937.01
	金兄弟の忠誠	16	
朝鮮通信局	明暗	13	
	二つの村	14	
	興甫傳	13	
	更生	14	
	復興の扉は開く	14	
	半島青年の忠誠	14	
	護国の二柱	14	
慶尙北道	桃花洞	17	
	自力	17	
	更生	13	
	蚕の神秘	36	
	蚕の漫画	12	
	若人よ斯くあれ	12	
	更生の道	15	
	支那事変と聖戦喇叭	17	
慶尙南道	明暗の岐路	20	1940頃
財務局	納税優勝旗		
	光ある道		
朝鮮啓発協会	兄の凱旋		
	父帰る		1943.04.05
未詳（朝鮮軍司令部での試演）	銃後の国防		
未詳	戦陣訓		
朝鮮金融組合連合会	婦人の力	14	
	甦えるもの	14	
	明るい村	14	
日本教育紙芝居協会	かわいい孫娘		1942.07.20
	半島の陸鷲		1943.07.25
東亜国策画劇社	民族の血潮		1942
	楽しい前進		1942
	黄ばむ松山		1943
	花微爺		1944
	狸林		1944

大きな反響を呼びおこしたといえる。

## 2. 植民地朝鮮の紙芝居目録

これまでの調査によると、植民地朝鮮では全 37 編の紙芝居が流通していたことが明らかになった。<sup>1</sup> 制作団体としては「朝鮮総督府の情報科」「逓信局」「財務局」「慶尙北道」「慶尙南道」「朝鮮啓発協会」等の朝鮮で制作されたものと、「日本教育紙芝居協会」や「東亜国策画劇社」等の日本で制作され、朝鮮へ輸入して使用したものが挙げられる。

全貌が分かる作品は朝鮮総督府の情報科制作の〈生業報国〉、慶尙南道制作の〈明暗の岐路〉、朝鮮逓信局制作の〈復興の扉は開く〉、日本教育紙芝居協会制作の〈かわいい孫娘〉、〈半島の陸鷺〉、東亜国策画劇社制作の〈民族の血潮〉、〈楽しい前進〉、〈黄ばむ松山〉、〈花微爺〉、〈狸林〉の 10 編である。東亜国策画劇社制作の〈黄ばむ松山〉、〈花微爺〉、〈狸林〉の 3 編は筆者の調査によると、現在日本には存在せず、朝鮮総督府文書で韓国にのみ残っている作品である。この他に絵は遺失されたが、



〈図3〉 当時の慶尙北道における紙芝居研究会の試演

セリフは残っているものに慶尙北道の〈桃花洞〉、〈更生の道〉、一部だけが残っているものに朝鮮啓発協会の〈兄の凱旋〉、〈父帰る〉、発行先未詳の〈戦陣訓〉がある。これら以外の作品は当時の新聞記事を通じて、存在は知られているが、作品はまだ発掘されていない状態である。このような紙芝居の対象は全て朝鮮の大人であり、子供を対象とした紙芝居はまだ発見されていない。<sup>2</sup>

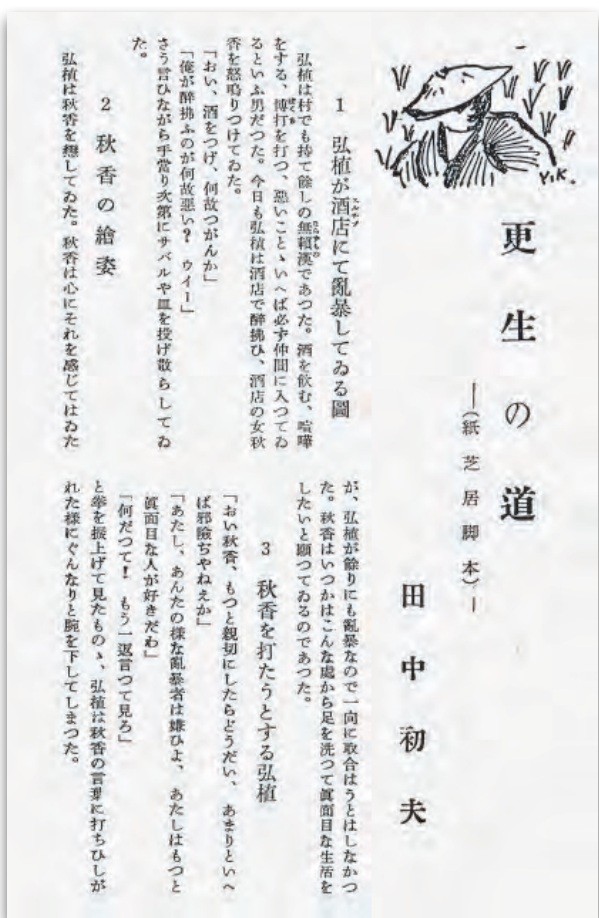
現在、韓国における紙芝居研究は始まったばかりの段階で、まだ多くの作品の発掘とリストの整理が必要であり、作品の詳細な内容分析を行わなければならないという課題を抱えている。

## 3. 紙芝居を利用した情報宣伝

### 1) 政策広報のための紙芝居

都市から離れた地方においては慶尙北道と慶尙南道が紙芝居を活発に用いた。慶尙北道は「農村振興」というスローガンを掲げて、当時の道知事である上瀧道知事が紙芝居を積極的に導入し、利用したのが始まりである。特に、当時の高かった失業率を考慮し、失業状態にあった朝鮮人インテリを紙芝居師として訓練し、台本を作成させた。ストーリーは簡単に組み立て、朝鮮語で説明する仕組みであった。<sup>3</sup> 慶尙北道の産業課長が中心となって、各農振幹事を集め試演を行ってから、都内を回る形で運営された。<sup>4</sup>

慶尙北道制作の紙芝居の特徴は、朝鮮においても 1936 年という早い時期から制作していたこと、たいていが地域振興の内容ということ、日本人ではなく朝鮮人の産業課長が中心となって朝鮮語で説明したこと、朝鮮人インテリを積極的に参加させたことなど、現地化され



〈図2〉 慶尙北道の〈更生の道〉の台本



〈図4〉 密航防止紙芝居〈明暗の岐路〉

ていたことが挙げられる。

また、慶尙北道地域では、教育画劇協会が命脈を保ちながら、解放後も農村の啓蒙のために紙芝居を持続的に公演したことが分かる。1949年、学務局の協力下、国民学校及び一般道民の啓蒙を目的に地方啓蒙班を発足し、〈三年とうげ〉、〈儉約〉など、15編の作品を持って巡回公演を行った事実があり、<sup>5</sup> 地域振興のための紙芝居は相当の期間続いたと思われる。

慶尙南道の場合、馬山では円滑な税金徴収のために座談会を開き、紙芝居を公演したが、具体的な作品名とストーリーは分からない。<sup>6</sup> 釜山では地域の特性を反映した密航防止の紙芝居を制作した。日本は日本本土へ朝鮮人が密航するのを防ぐために取り締まりを強化したが、密航証明書の偽造やブローカーの養成など、かえって密航の方法が多様化するといった状況がもたらされた。特に出港地である釜山においては、数多くの渡日希望者が殺到し、釜山警察の業務が過重になると、慶尙南道では1940年3月から3ヶ月ごとに1回以上、密航防止の座談会を開き、紙芝居を観覧させた。紙芝居〈明暗の岐路〉は、渡航のための審査過程、「悪魔のような」朝鮮人ブローカーとの出会い、「親切な」日本警察の手助け、

密航の危険性と高い失敗可能性、厳重な教訓によって、緻密に構成されている作品で、結局、法を守って内地へ渡ることが正しいというメッセージを伝えている。現実的な状況を導入した劇的なストーリーで、面白さと支配政策を共に伝える役割を果たしたといえることができる。1940年頃から慶尙南道は地域の政策を広報するため、座談会を開催し、朝鮮人の耳目を引くために紙芝居を積極的に活用したことが分かる。

金融機関においては、紙芝居の献上公募を通して朝鮮人の自発的な参加を誘導した。特に郵便局、金融組合及び財務局では、財政調達のために簡易生命保険の加入広報や納税を督励する紙芝居の献上公募が多数であった。当時、貯蓄奨励のための朝鮮総督府財務局の献上公募を詳しく見ると、場面は15～20枚で構成され、概ね20分以内に公演を終わらせることを作品分量の目安とした。<sup>7</sup> 当時、2等（賞金50ウォン）と3等（賞金25ウォン）の当選作が全て慶尙道と全羅道の地域住民の作品であることを考えると、地方でも興味を持って参加していたことが分かる。<sup>8</sup> 1938年、植民地朝鮮の1人あたりの国民所得が年間130ウォンであったことを考慮すると<sup>9</sup>、1等賞金100ウォンは相当な金額で、朝鮮総督府が貯蓄奨励の方法として紙芝居に大きな期待をかけていたことが分かる。

通信局の作品の中で全貌が分かるものは〈復興の扉は開く〉である。この作品は主人公のヨンシクが家族のために無理して仕事をし、病気にかかるが、簡易保険の健康相談書で診察を受け、十分に療養した末、完治して簡易保険に感謝する内容である。この作品は朝鮮民衆の不安な生活に「生活の安全と健康の保護増進」を力説し、簡易保険への加入を勧誘している。ヨンシクという普遍的な朝鮮人を作品の中に登場させることで、簡易保険の重要性を効果的に顕したといえるだろう。

以上のように広報に用いられた紙芝居は、実生活と密接に関連するテーマを、平凡な朝鮮人を主人公として、簡単なストーリーと視覚イメージを共に提供することで、遊戯として朝鮮人にとって身近な存在となった。つまり、朝鮮における紙芝居は朝鮮の実状に合わせて再生産されたメディアだといえることができる。

## 2) 思想教育のための国策紙芝居

日中戦争以降、日本は人的、物的資源を動員するために、時局宣伝に全力を尽くした。朝鮮総督府は時局宣伝のための方策を講ずる中、東京で流行している紙芝居

に着目し、紙芝居を地方に巡回させることを決定し、追加予算を要求した。<sup>10</sup> 1920年朝鮮情報委員会の「施政周知運動」と比較してみると、1930年代の宣伝方法に新たに追加されたメディアが「紙芝居」である。

朝鮮総督府が持ち込んだ紙芝居の実体は『毎日新報』の記事からうかがうことができる。「時局認識の徹底強化」を目的とした紙芝居は、28枚1セットで構成され、全て説明するのに1時間程度がかかる形で、200郡島に配給されると述べている。特に1400カ所の市日を利用して、紙芝居を観覧させ、予想以上の成果を上げていると報じられている。<sup>11</sup> 通常、「紙芝居」が20景で構成されるのに対して、枚数が多く、舞台も備えられていることから推測すると、物資統制の状況下でも全幅の支援を受けて、制作されたことが予想される。

農村地域を中心とした巡回公演の事例を見てみると、江原道の場合は、1938年8月から4ヶ月間805カ所の部落で973回の公演を行っており<sup>12</sup>、1939年、全羅北道では2331回の時局認識紙芝居公演に観覧者が23万420名であった。<sup>13</sup> 重複観覧者を考慮しても、少なくない数値であることが分かる。それだけではなく、慶尙北道英州郡(1937.11.28)、全羅南道光山郡(1938.11.8)、京畿道各郡(1938.5.26)などで公演されたことを『毎日新報』では報じている。公演された作品は光山郡では〈支那事変と銃後の半島〉、〈金少佐(金少佐の奮戦の異名であろうと思う)〉、京畿道では〈金兄弟の忠誠〉である。

当時、大きな人気を得た作品は〈金少佐の奮戦〉である。金錫源少佐はソウル出身で、日本陸軍27期生である。1937年、中国の南苑戦場で足首を骨折する重傷を負っても、一個大隊の兵力として、中国軍の一個師団と戦って南苑行宮を占領し、日中戦争の英雄となった。1939年3月に帰国して朝鮮人の戦争英雄として仰がれた。時局講演会の講演者としても大きな人気を得た金錫源少佐は、全国を巡回しながら日中戦争の宣伝と共に朝鮮人の入隊を勧誘した。<sup>14</sup> この人物を主人公とした紙芝居〈金少佐の奮戦〉の実物は発掘されていないが、軍人としての勇猛さが強調されていたことは容易に推測できる。

植民地朝鮮においての時局認識紙芝居の特徴は「美談」の再生産と拡散である。朝鮮人は戦争英雄の美談に感動を受け、困難な状況にもかかわらず、国防金を委託するなど<sup>15</sup>、新たな美談が再び生産されていく。このような行動に感動し、他の人がまた献金をするという構造

が生じるのである。このような美談は戦争の惨状が隠へいされ、「軍神」としての英雄性だけが強調される危険性を抱えているといえることができる。

#### 4. 今後の課題

植民地朝鮮の紙芝居はまだ発掘すべき資料が多くある。また、散らばっている資料のリスト確保と整理を優先し、研究土台を構築する作業が先行されるべきである。日本とは違って朝鮮の場合、セリフが朝鮮語と日本語が併記されている作品もあって、翻訳の問題や当時の朝鮮語の表記法の問題など語学的な側面からの研究も必要である。また絵の構図や中心人物の目線、彩色と印刷、流通など多様な側面からの学術的な研究が行われれば、もっとも有効な研究成果が得られると思う。

<sup>1</sup> 26編の作品リストは雑誌『朝鮮』(1938年5月号)に記載されたもので、大竹聖美によって初めて報告された。『朝鮮』には〈生業報国〉という一編の作品が公開されている。(大竹聖美、「近代韓日児童文化教育関係史研究：1895-1945」、延世大学博士学位論文、2002)。他の11編のリストは当時の新聞や雑誌などを通じて筆者が発見したものを追記したものである。

<sup>2</sup> 韓国の京郷新聞には植民地朝鮮でも子供用の紙芝居を活用した教育を受けたという金仁會教授の証言が記載されている。金仁會教授は、ソウルの明洞の位置にあった愛国幼稚園(日本人の経営)で、戦争英雄の物語をもとに作られた紙芝居を通して、日本人と戦うイギリス人やアメリカ人はみんな鬼であると信じていたとしている。(『내가 받은 교육』『경향신문』1975.2.19)

<sup>3</sup> 「笑ひ」で潤す振興策、農村に「紙芝居」登場『釜山日報』(1936.12.10)

<sup>4</sup> 「農村に「笑ひ」を送る紙芝居愈よ登場」『釜山日報』(1936.12.23)

<sup>5</sup> 「畫劇啓蒙班을 巡廻」『嶺南日報』(1949.4.26)

<sup>6</sup> 「密造紙芝居」『釜山日報』(1941.11.20)

<sup>7</sup> 朝鮮総督府官報 3427号(1938.6.21)

<sup>8</sup> 朝鮮総督府官報 3474号(1938.8.15)

<sup>9</sup> 「통계청 출간, 통계로 다시보는'해방이전 경제·사회상' 발간 평균수명 45살서 72살로 늘어」『한겨레신문』(1995.9.22)

<sup>10</sup> 「時局宣傳에 幻燈도 出動」『東亞日報』(1937.8.30)

<sup>11</sup> 「時局認識強化資料로 “紙芝居가미시마이” 각지에 配給」『毎日新報』(1937.10.7)

<sup>12</sup> 경성지방법원 검사국 문서, 「의첩의 단속상황」

<sup>13</sup> 「時局映畫、展覽會等 三千七百回開催」『毎日新報』(1939.4.9)

<sup>14</sup> 한국학중앙연구원, 『한국민족문화대백과』(検索日 2017.11.30)

<sup>15</sup> 「가미시마이 보고 感激 國防獻金한 女性」『毎日新報』(1937.12.29)